

能化時代初期における十劫久遠論の研究——月筌師を中心に——

岩 田 恒

序 論

本稿では、江戸時代を本願寺における学林創設から間もない能化時代初期^①まで遡り、宗学が形成しつつあった当時の十劫久遠の思想に着目していく。具体的には、能化時代初期における十劫久遠論の一事例として、第二代能化知空（二六三四―一七一八）の門下である、月筌（一六七一―一七二九）の思想を中心に取り上げる。

ここでまず筆者が注目する、能化時代初期と月筌に関する先行研究に触れ、問題の所在を明らかにする。能化時代初期の宗学は、「素朴時代の宗学」^②とも位置づけられるように、これまで注目されることは少なかった。しかし、浄土真宗における根本問題、例えば仏性論・衆生論・仏身仏土論等は、「初期宗学者の見解以上いかに発展せるやの跡を知るに苦しむのである」^③という見解もなされており、この点に関する再考の余地はあると思われる。そこで今回は、この根本問題の一つであり、尚且つ注目すべき思想を含む十劫久遠論に焦点を当てるのである。続いて、能化時代初期における十劫久

遠論を研究するに当たり、なぜ月筌に着目するのか、その理由を三つほど略述する。一つ目は、月筌の十劫久遠論は、当時の他学匠に比べ、「詳細にして深遠なる提唱」^④と評され、また「本宗に於ける十劫久遠論中の数々成仏説の起源」・「宝雲一派の無師独悟説に影響する」^⑤とみられる所論が胚胎する。よって能化時代初期、更には江戸期宗学における十劫久遠論を研究するに当たり、月筌の思想を研究対象とする必要性がある。二つ目に、このような月筌の十劫久遠論が、彼の著作である『真宗關節』においても展開されているのであるが、この書物は後に発達した論題研究の基礎ともいうべき名著と評されるからである^⑦。またここでは、上述の浄土真宗における根本問題、言い換えれば、仏教における根本問題についても論じられている。したがって『真宗關節』は、同時代の書物の中で特に検討すべき著作である。三つ目は、大坂地域の出版文化の興盛によって、真偽未決の聖教類が氾濫し、教学・安心の相承に影響を及ぼすことを危惧した月筌が、それらの正統を保持しようと努めた姿勢が、『月筌聖教目録』^⑧より窺えることである。このような態度は、門弟

にも受け継がれ、宝暦九年（一七五九）、桂巖（二七〇三―一七七八）、泰巖（二七一―一七六三）等が、權威となるべき和語聖教の校刻を宗主に申し出、法如宗主（二七〇七―一七八九）は、これを宝暦十一年（一七六一）に迎える宗祖五百回大遠忌の記念事業の一つとして嘉納し、泰巖等を幹事に任じ、『真宗法要』編纂を行ったとされている。^⑨このように、在野から中央へ向けての積極的な働きかけがみられ、この動きが当時の宗学や安心の形成にも影響を与えていたと考えられる。つまり、従来この時代に関する宗学史は、能化を中心を示される傾向にあったが、それに加え、在野の動向の詳細なる検討も必要であると思われる。

これらの点を踏まえ、本稿では、上述の根本問題に関する初期宗学者の見解の中、在野学匠である月筥の十劫久遠論に焦点を当て、これを時代背景・地域状況と照らし合わせて再検討すると共に、親鸞・歴代における十劫久遠の思想との比較検討を行うことで、能化時代初期における十劫久遠論の思想的特色、及び同時代的意義の一端について考察していく。

そもそも、筆者の十劫久遠論の研究は、阿弥陀仏の成道が十劫か久遠かといった思想が、阿弥陀仏の救済の対象である我々といかに関わり、どのような意義をもつのか、という疑問に端を発するものである。本稿は、この点に論及するための一考察と位置づけられる。また、能化時代初期に関する従来の評価（『素朴時代の宗学』や、この時代の宗学史（能化中心）を再検討する必要性があることに論

及するための、一段階とも位置づけられる。

第一章 月筥の略歴と時代背景

月筥の行跡に関しては、『笛峰道人月筥律師行状』、『大谷本願寺通紀』、『清流紀談』、『本願寺派学事史』（以下、『学事史』）、『真宗学史』、『真宗本派学僧逸伝』、『真宗新辞典』、『日本仏教人名辞典』、『真宗人名辞典』等に記されている。^⑩なかでも、月筥が享保十四年（一七二九）に示寂した後、後嗣月溪（一七一六―不明）によって享保十五年（一七三〇）に著された『笛峰道人月筥律師行状』には、月筥の行状が詳述されている。また上記の伝記類の大半は、『笛峰道人月筥律師行状』に記された行跡を基とし、これに月筥の著作や思想に関する文言等を加えたものといえるであろう。以下で、主に『笛峰道人月筥律師行状』の記述内容を用いて、月筥の略歴を記す。月筥は、寛文十一年（一六七二）十一月十一日に摂津天満街に生まれる。^⑪師父が諸方に遊化していたこともあり、幼齡より寺務を行い、毎年夏秋の時期には、百余村の門葉を巡り人々を教化していた。貞享三年（一六八六）、十六歳にして定専坊の住職となる。居るところの室を蓮華藏閣と称し、学寮をつくり同名を付した。また華藏会を設立して、毎月十五日に仏前において課誦し、あるいは法門を談じ、あるいは門弟を試していた。享保十四年（一七二九）十一月十五日、五十九歳にして示寂している。

月筥に関する評価として、『学事史』には、「若森と同時代に於て、

学徳相匹敵して、宗侶領袖たりし者は、大坂天満の月笠とす^⑮と述べられ、『真宗學史』には、

浪華の月笠亦碩学高德の譽ありて師知空の名を辱かしめず。

(中略)『稱讚浄土教駕説』『正信僞勸説』『和讃管解』『真宗關節』等の遺著、今猶ほ愛読するもの多し、就中『真宗關節』は十五卷ありて(中略)此中廻向に就きて、利他廻向は真宗教義にも亦許すべしといふ説の如きは当時既に物議を起さんとせしも、月笠の名声の籍甚たるがため人恐れて之を責るものなかりしといふ^⑯。

と記されている。また大原性実氏は、

特に注意したい事は、彼の宗学が常に修道・実践・愛樂の上に基調を置き、これと相即せることである、即ち阿弥陀仏論に於ける数々成仏説といひ行信論に於ける能行説といひ、報謝論に於ける不回向説と云ひ悉く彼の法味愛樂の上より詮表された学説である^⑰。

と述べている。

次に、月笠が生きた地域の状況について窺うことにする。

和田幸司氏は、第二代能化知空が記した「光善寺教行寺箇条書の破文」(以下、「破文」)を検討し、「安心決定鈔」の誤読による信仰すなわち、「煩惱即菩提」といった思惟が、元禄初期の河内・摂津国において、影響力を持っていた^⑱ことを指摘している。この「破文」は、元禄八年(一六九五)に一家衆である寂玄と寂超とが、能

化知空によって処罰された事件の論争の経緯・具体的内容を知る上で重要な資料であるとされる。注意すべきは、本事件の当事者である寂玄(河内国・出口光善寺)と寂超(摂津国・名鹽教行寺)は、『安心決定鈔』を中心とした十劫安心・仏凡一体を内容とする真如法性傾倒型の安心であったとの指摘がなされ、月笠(天満定専坊)の周辺にも、その影響が及んだ可能性が存する点である。和田氏の論考の中では、光善寺に宛てられた「諸国江遺書状留」元禄八年(一六九五)十二月二十七日条の記事が取り上げられている。これについて同氏は、

翌元禄九年(一六九六)一月に光善寺は東派に転派したことから推察すると、おそらく、この記事は本異義事件である「安心決定鈔」における無帰命安心と関わっているものだろう。本史料とはほぼ同内容の書簡は、「諸国江遺書状留」元禄八年十二月二十七日条には十通存在し、いずれも摂津・河内国の寺院ならびに住職の「不屈」を対象とする内容のものとなっている。そのうち、宛先が上寺に宛てられたものは出口光善寺をはじめとして、大坂天満定専坊・堺宝光寺・九条西光寺・大坂金光寺・萩清光寺・摂津超光寺となっており、光善寺末寺以外にも異義として広まっていることが理解できよう。つまり、「安心決定鈔」に関わったの無帰命安心は、摂津・河内国において、ある程度広がりをもっていると考えるとよいだろう^⑲。

このような和田氏の論述は、近世仏教思想史の分野において、大桑齊氏^⑧が主張する見解に、事例提供を行うものである。大桑氏は、江戸初期の民衆には「煩惱即菩提」という思惟、そして「唯心淨土己心弥陀」・「心外無別法」等の言葉に示される、心を中心とした仏教唯心論が広く展開していたという見解を示し、更に当時の真宗に關しても、「往生正覺同時成就」の思想を含む「安心決定鈔」が大きな影響力を持ち、「生仏互入一体」という思想と相俟って、「衆生と仏の即自的無媒介の一体説」が発生していたと主張している。

以上のような指摘を踏まえると、月筈が生きた時代、そして周辺地域に、所謂十劫安心や無帰命安心といった思惟が、ある程度広がりをもせていた可能性が高いと思われる。よって以下では、このような地域状況にも特別の注意を払いながら、月筈の思想を検討していくこととする。最後に、一言付け加えると、筆者の立場は往々にして、従来の月筈に関する評価の延長線上にあるものであるが、本稿ではその中、上述の根本問題、特に十劫久遠論についての彼の評価を、より一層強調することを主要な課題とする。

第二章 月筈における十劫久遠論

第一節 月筈の十劫久遠論と十劫安心

月筈に関する先行研究においては、彼の十劫久遠論の説示が詳細に取り上げられてはいるものの、この思想が形成されるに至った要

因、更には思想的位置付けに対する検討が十分になされていないように思われる。よって第一に、月筈は、当時身近に存在した十劫安心の誤った信仰に対して、教学・安心の正統を保持するため、「學問即護法、護法即學問」^⑨という意識のもとに、十劫久遠論を展開している一面があるという試論を提示する。

そこでまず、月筈の安心と學問觀について考察する。その際、安心に關しては「八條問答」を、學問觀については、「真宗關節」「護法篇」を用いて検討していく。「八條問答」は、享保三年（二七一八）三月九日、月筈四十八歳の時の著述で、華藏閣において、門人と對話し問答した内容を記録したものと考えられる。末尾の文には執筆事由として、秘事法門への批判と、機扱いにてはからうことへの注意があげられている。本文内容を大まかに述べると、安心、また複数の疑難や邪義についての問答となっている。ここで注目すべきは、全体の半分以上が十劫安心に関する文言となっている点である。このような特徴を確認した上で、「八條問答」より、①「安心」、②「十劫安心に対する説示」、の二点について考察を進めていく。

まず、①「安心」については、我宗の安心はどのように心得るべきかという問いに対する月筈の返答箇所に、

一期に一度如来に向ひ奉て。御助候へと頼み申せは。必ず如来の御助にあつかり候て。其一念の時より。撰取の心光におさめとられまいらせて。往生淨土の人数一分に定給はり。（中略）

順次は決定往生をとげ奉ること。露ちりほとも疑う心なく喜び奉るを。まさしく一流相伝の安心と申なり。

〔真宗全書〕六二、一頁

と述べられており、この文からは、師知空の安心が蓮如のそれを色濃く承けたものであるのと同様に、月筌にもその傾向を読みとれる。次に、②「十劫安心に対する説示」は、「ある人の申候は」と始まり、「ある人」(十劫安心)の所説が述べられ、この人(十劫安心)の所説はどうして仮事なのか、という問いに対する月筌の返答にみられる。すなわち、「大なる仮事にて候。これは昔十劫秘事とて、

甚たいましめにくみたまふ邪解にて(以下省略)②」とし、以下では、このような邪解は附仏法の外道の仕業とすると、厳しい態度を表明している。そして、十劫秘事の所説が仮事である根拠として、「正依の浄土三部経」・「三国伝来の論釈」・親鸞の著述等に、そのような言葉がなく、特に「蓮如上人御文章の中に。この邪解を深く誠め給ふ御言葉ある」ことをあげている。更に、『御文章』中の十劫安心に対する破邪(十劫秘事を破す)・顕正(眞実信心を顕す)と同趣の論法で、これを誠しめている。

これらの文言から、当時月筌の周辺に十劫安心が存在したことが窺える。また問い(十劫安心の所説)の中に、秘事法門とみられる所説があり、月筌自身も「十劫秘事」と明言していることから、②「十劫安心に対する説示」は『八條問答』の執筆事由である秘事法門への批判に該当する。十劫秘事に関する文言が全体の半分以上を

占めることも考慮すると、『八條問答』の主題は十劫秘事への対応であるといえよう。そして①・②の考察から、『八條問答』においては、蓮如型の安心、一念帰命の他力信心をもって十劫秘事に対応していることが確認できる。

続いて、『真宗關節』『護法篇』より月筌の、③「学問観」について考察していく。「護法篇」は、享保三年(一七一八)六月に起草された。これは『八條問答』執筆からおおよそ三ヵ月後のことである。本文には、③「学問観」や、当時の学問の状況、眞宗僧侶のあるべき姿、等について記されている。

所詮己か平生に談する仏法は何の爲と思てなす事そや、若正法を相統して仏法の命脈の断絶せさらん爲と思や、又は唯己か見識を人に称譽せられん爲と思や、(中略)若唯己か見解を称美せられん爲ならは、即是れ附仏法の外道と云者也、(中略)若実に護法の志にて聖教を沙汰する心ならは、たとひ己か爲には怨讎なりとも、正理を顕す人ならは、随喜し讃嘆すへし、これ正法の弘通を喜ぶ故なれば、それこそ護法の本意と云へし

〔真宗全書〕五三、三頁―四頁

ここで月筌は、正法を相統して仏法の命脈を断絶させないために仏法を談すべきであるとしている。また、護法の志にて聖教を沙汰すべきであり、正法の弘通を喜ぶことこそ護法の本意であると述べている。

これらの文より、月筌の学問観には、「学問即護法、護法即学問」②

という一面が窺える。つまり、正法に反するような思惟・信仰には、自身が護法の志にて聖教を学び、正法を談じることで対応していくという、積極的な姿勢を一面に見出すことができると考える。このことは「彼の宗学が常に修道・実践・愛樂の上に基調を置き、これと相即せる」との指摘からも窺うことができる。また、己の見解を称嘆せられんがために仏法を談ずる者は、「附仏法の外道」であるといわれているが、これは、『八條問答』②「十劫安心に対する説示」の中にある、「もとより利用のために。愚なる在家の輩をたふらかして。いかさまめつらしき教にて（中略）かやうの邪解は。附仏法の外道のしわざ」との文と似通った表現となっている。月笠は『八條問答』にて破した、利用のために珍しい教えを説く十劫秘事と、「己の見解を称美せられん為」に仏法を談じる者は、共に「附仏法の外道」としているのである。つまりこの部分では、学問即護法という彼の学問観と、「附仏法の外道」（利用のために珍しい教えを説く十劫秘事・己の見解を称美せられん為に仏法を談じる者）が、対立するものとして説かれていると考えられる。

以上で、月笠の安心と学問観に関する検討を終えるが、当箇所では、月笠の学問や著作中の説示と、当時彼の身近に存在した十劫秘事が、一面において関連をもつものであることを特に注意したい。

次に、先の検討結果を踏まえ、月笠の十劫久遠論と十劫秘事との関連について考察していく。その際、『真宗開節』『源頭論』と、『真宗開節』の末尾に添えられた門弟泰巖の跋文を用いることとす

る。「源頭論」は、享保四年（一七一九）十一月十九日、月笠四十九歳の時に著わされた。これは「護法篇」執筆からおよそ一年五ヶ月後のことである。本文では、仏身論・衆生論・仏性論等が縦横無尽に論じられている。その中、特に「十劫久遠の問題について、仏と衆生の関係を考察するに詳細を尽している」③④ことに注目し、④「十劫久遠の説示と十劫秘事との関連」について検討する。

まず、「源頭論」の初めには、源頭（諸仏の最初として根本の師となる仏）についての疑問があるものに対して、たとえ源頭を知り尽しても最要は堅固の信心であることを述べる。これは、『御文章』にて十劫秘事を誠しめる際に用いられた、「弥陀如来の正覚をなりたまへるいはれをしりたりといふとも、われらが往生すべき他力の信心といふいはれをしらずばいたづらごとなり」⑤との文言と内容的に同趣である。また『御文章』三帖目八通にて十劫秘事を誠しめる箇所にもみられる、「宝の山に入て手を空しくする」⑥との文言も用いられていることから、「源頭論」の起草に際し、月笠には十劫秘事への意識があつた可能性を見出せる。そこで、「源頭論」において、具体的に十劫秘事について述べ、これを破していかれる部分を取り上げようと思うが、その前に、この部分に至るまでの「源頭論」の流れを、先行研究⑦を参考にしながら確認しておく。

初めに、(i) 久遠と十劫の関係「果後の方便」(ii) 十劫六義(iii) 数々成仏説と同趣の説示(iv) 久遠と十劫の関係「無二無別」、等の十劫久遠論が十劫秘事に関する文言に先だって展開され

ている点に着目する。^②

(i) 久成本有の阿弥陀仏が十劫の昔、衆生済度のためかりに法蔵比丘となり、世自在王仏の所にて大願を発し、再び正覚をなし、西方に浄土を構えて今時濁惡の凡夫を引接されることを「果後の方便」とする。^③

(ii) 十劫について、鎮西の所論である、単・常演・赴機・延促・本門・迹門の六義を用いて、真宗義は赴機を主とし、これに本・迹・単の三義を撰ずとする。^④

(iii) 衆生は無辺であり値仏の因縁に親疎があるから、その衆生の機類に應じて幾度も因に降り果に昇って、済化の結縁を設け救済される。そしてこれを極言して「一機一縁」ともする。^⑤

(iv) 久遠と十劫の関係を「無二無別」とする。^⑥

これらの十劫久遠論によつて、(A) 阿弥陀仏は無始本有の第一仏(本有の誓願)であり、(B) 十劫正覚の弥陀は、迷いの衆生を救うために再成された仏であることを示していられる。つまり、阿弥陀仏を本師本仏とした上で、十劫義を明確にしているのである。

次に、(一) 衆生論 (二) 仏性論について取り上げる。これらの思想も十劫秘事に関する文言に先だつて展開されている。すなわち親鸞の、「自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已來常沒常流転、無_レ有_二出離之縁_一」の文等をあげ、

(一) 自力では妄惡を転して真善を成すへき便りはなく、この

妄惡を転し真善を成じなければ、また恒沙劫にも成仏の正因を成することはできないとする。また衆生は無辺なるもので、値仏の因縁には親疎があるとみる。そして凡夫の無明を無始のものとする。^⑦

(二) 仏性を正因仏性縁因仏性によってあらわす。正因仏性とは如来の自性本有の徳(体徳)が法界に遍満するものであり、縁因仏性とは如来回向の大信である。そして正因仏性の妙用は、縁因仏性をもつて顕われるとする。また衆生の仏性は無始より法爾として無明に変わっているものとする。^⑧

この衆生論・仏性論によつて、(a) 衆生は無始より迷いの存在であり、(b) 妄惡を転じなければ成仏の正因を成することはできないとする。

このように、月筌は阿弥陀仏と衆生を対立的「仏(A)・生(a)」「仏(B)・生(b)」な存在として捉えている。そして、その上で、「無始より法爾として生仏の差別有て、而もその性同か故に、如来本有の大慈悲より衆生の妄心を転して、自体の性徳と同一の作用をなさしめんために、この大願を建立し給ふ也」と、衆生は阿弥陀仏の本願によつて、妄心を転じられなければならないことが示されているのである。

以上で、十劫秘事に関する文言へ至るまでの論理展開を確認したので、ここからは、具体的に十劫秘事について述べ、この所説を破

していられる部分を取り上げよう。すなわち、十劫秘事の所説として、

弥陀は十劫已前に衆生往生せずは正覺とらしと誓ひ給ひて既に正覺なり給へは、我等は十劫の昔に往生成仏せり、この道理を知ぬ故にいままで迷ひ来れり、これを知るときは何ぞ迷にととまるへき、これに由れば今ことさらに仏を頼むと云義にも及はぬ」
 〔真宗全書〕五三、七七頁・傍線は筆者

と記されている。このような所説に対して、月笠は、「無始本有に同一法性の上に法爾として迷悟の品と云ふものある」^⑧ことを知らない、ということ述べていく。つまり、傍線部の、十劫の昔にすでに往生成仏している、という誤った理解に対しては、上述の論理「仏(A)・生(a)」によって、

阿弥陀如来は無始本有に發真して源に住し給ふ仏なる故に、その知見よりは、十方法界の情非情ともに本来成仏に非ざることなしと見給ふなり
 〔真宗全書〕五三、七五頁

と述べ、また、

衆生と云ものはこれまた無始より本有と無明の諸惑に迷うていける者なる故に、本来仏と云ふ事を知らぬ
 (同右)

として、仏と衆生の差別を示していく。そして、この上で、

十劫已前に衆生往生すと云は、如来の正覺の上の成就の徳をの給ふなり、衆生の方にはその一念の真信発らざる内は、十劫已来そのまま迷妄の衆生也

と、この誤りを破していられるのである。また、太線部の、仏を頼む必要はない、という誤解に対しても、上述の論理「仏(B)・生(b)」によって、「仏は修行して衆生を救ひ給ひ」、^⑨「衆生は仏を頼て迷を転ずる也」とした上で、「迷の衆生となる方には、仏を頼まずして往生成仏すると云義はなきこと也」^⑩と、十劫秘事の所説を破していられるのである。

このように、「源頭論」における月笠の十劫久遠論は、十劫秘事を意識して論じられている一面があると思われる。つまり月笠の、「仏と衆生の関係を考察するに詳細を尽している」という十劫久遠論の特徴も、十劫秘事との関連を有することが一要因となつてあらわれるものと考えられる。

このことは、「真宗關節」の末尾に添えられた門弟泰巖の跋文によつても窺える。この跋文は、宝暦四年(二七五四)九月、月笠没後二十四年に記されたものであるが、ここで泰巖は「真宗關節」五篇の所題より、護法の志に背く者の誤りをあげ、これを誡めている。その中、「源頭論」の所題に該当する箇所では、久遠劫来の徳澤を知らずに十劫正覺にとらわれる者を誡めている。この誡めは、「源頭論」の内容からして、おそらく十劫秘事に対するものであろう。これはあくまで門弟泰巖の理解であるが、「源頭論」であらわされる十劫久遠の説示と十劫秘事との関連が述べられているのである。

『八條問答』においては、師知空同様に蓮如型の安心、一念帰命

の他力信心をもつて十劫秘事に対応している。そして「真宗關節」「源頭論」では、十劫秘事の、「過去に此の如き事実があったのである」と云ふことを認めて、疑はない忘れないと云ふだけで、現在迷ひの私が救はれると云ふのではないから、仏の救済に對した衆生の信仰ではなくて、客觀的の理解に止まる^④ような誤った信仰に對して、十劫久遠論及び親鸞の「自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已來常沒常流轉、無有出離之緣」という衆生觀より、無始よりはたらき続ける弥陀と曠劫久遠より迷う衆生を對立的に捉え、その上で「弥陀如来の正覺をなりたまへるいはれ」（如来正覺の因果）・「われらが往生すべき他力の信心といふいはれ」（衆生往生の因果）を流動的にあらわしたものと思考する^⑤。

第二節 歴代の十劫久遠の思想と月筈の十劫久遠論の比較検討

次に、歴代の十劫久遠の思想と、月筈の十劫久遠論の比較検討を行い、彼の十劫久遠論の位置づけや特異性を、一層明瞭にしていきたい。その際に、同時代の学匠である知空等の説示も参考にすることとする^⑥。

覚如は、阿弥陀仏が一切諸仏の本師本仏であることを一層明瞭にするために、久遠実成阿弥陀仏、すなわち十劫久遠の思想を論じている。換言すれば、諸仏との比較を通して阿弥陀如来の超証性が示されるのである。『口伝鈔』（下）第十五条では、阿弥陀仏と釈迦諸

仏の關係について、釈迦及び三世十方の諸仏は久遠実成の阿弥陀仏を本師本仏として、成仏し、極樂界より出現して、淺近の機のために利生方便をめぐらすとする。また、一切諸仏は、弥陀が衆生化益のために機に應じて化現されたものであり、その教えは權假方便の教えであつて、阿弥陀仏の本願を説くことこそが出世の本意であると顯示するのである^⑦。

続いて存覚は、『顯名鈔』にて阿弥陀如来を「久遠実成の覺体、無始本有の極理」と定め、久遠仏より迷ひの衆生を救うため法藏菩薩とあらわれ、發願修行して成道した仏が十劫仏であるとする。更に「淨土真要鈔」では、久遠仏を「久遠実成の古仏」、十劫成道を「果後の方便」と示している。また、覚如の十劫久遠の思想にみられた阿弥陀仏本師本仏論との関連という点においても、存覚に至り一層明瞭になっている。そして覚如・存覚が、このような本師本仏論を展開した背景としては、對外的な要因が指摘されている^⑧。

また蓮如についても、『御文章』の中で阿弥陀仏の本師本仏の義が述べられており、この阿弥陀仏の本師本仏論を展開する中で、「久遠実成の古仏」と弥陀を定めている。しかしながら、蓮如においては、既に指摘されるように、阿弥陀仏の本師本仏論によつて、教団内に向け、弥陀一仏への帰依、礼拝対象の統一、更には諸仏・諸菩薩・諸神への不輕侮を示す意図があつたと思われる^⑨。

次に、月筈の十劫久遠論について一言すると、仏と衆生の關係を考察するに詳細を尽している点に特色がある。そして先の考察では、

このような特徴が、十劫秘事との関連を有することが一要因となつてあらわれるものであるという試論を提示した。

以上で覚如・存覚・蓮如・月筈における十劫久遠の思想的特色を略述した。覚如・存覚・蓮如に共通している点は、久遠実成の阿弥陀仏と本師本仏論の関連である。これは各々時代背景によつて対外的、もしくは向内的に弥陀本師本仏論を示す必要性があつたためと思われる。もちろん月筈においても、久遠実成の阿弥陀仏と本師本仏論とは関連を有し、言及もなされているが、彼の十劫久遠論による所顕は、十劫義（赴機）、すなわち久遠仏より迷いの衆生を救うために再成された十劫正覚の弥陀であるという、弥陀から衆生へのはたらきかけを述べることに重きが置かれている。このような月筈の思想的特色は、歴代の中、特に存覚の久遠仏と十劫仏の関係をあらわした説示を承けて展開されたものと考えられる。

また、月筈と同時代の学匠の十劫久遠論に目を向けると、十劫義について多く論じられていることが窺える。

例えば、知空は四種の十劫（単・常演・赴機・延促劫知）をあげ、その中、赴機の十劫をとっている。^⑤ 注目すべきは、この四種の十劫義というのは、浄土異流の四家の所説であり、知空は、「浄土異流の四家の解釈を用いながら、それを更に詳説することによつて、浄土異流と真宗教義との相違を明らかにしようとした」^⑥ ようである。これと同様の説示は月筈の著述の上にもみられ、「然るに此の赴機の談、望西に似たりと雖も、鎮家は単を正とし赴機を傍となす。今

家は赴機を正とし単を傍となす」等と述べている。^⑦ ここから、月筈においても、師知空を承けて、浄土門内の分斉を明らかにし、真宗教義の独自性を明確化しようとの姿勢が窺える。

つまり、歴代に比して、十劫義を示すことに重きが置かれているという月筈の十劫久遠論の特色は、十劫秘事との関連を有したこと、存覚の思想を色濃く承けたこと、更に浄土門内の分斉を明らかにし、真宗教義の独自性を明確にしようとの、当時の思想風潮も一要因となつてあらわれたものと考えられる。^⑧

第三章 十劫久遠の思想的意義の検討

これまで論じてきたように、月筈の十劫久遠論は十劫秘事の誤った信仰、つまり、自身の往生は、十劫正覚の初めより定められているから、このことを知りかえり、疑わず忘れないという客観的な理解に止まるものに対応する思想となっている。換言すれば、機受の信を忘却した十劫秘事の信仰に対して、現に迷う私が救われるという、仏の救済に対した衆生の信仰体型を顕示していかれたのである。また、月筈並に知空等の同時代の学匠に、十劫義によつて浄土門内の分斉を明らかにしようという姿勢が見受けられた。したがつて、能化時代初期における十劫久遠論の研究に際し、月筈を一事例として考察することによつて、以上二点の同時代的意義を提示することができるのである。

それでは最後に、これらの検討結果を踏まえた上で、親鸞の十劫

久遠の思想について若干の考察を試みよう^⑤。そこで筆者が注目するのが普賢保之氏の見解である。同氏は「浄土和讃」「諸経讃」の、

久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する

（『聖典全書』二、三八二頁・上段文明本・傍線は筆者）

の和讃を解釈するにあたり、一つ前に置かれる、

無明の暗夜をあはれみて 法身の光輪きはもなく

無碍光仏としめしてぞ 安養界に影現する

（『聖典全書』二、三八二頁・上段文明本・傍線は筆者）

の和讃との関連を検討している。その要を述べると、傍線部の「無明」は、我々の罪業の深さを表現したものであり、このような我々を救うために、無碍光仏として浄土にあらわれたとする。また、「法身の光輪きはもなく」の「法身」を法性法身、「無碍光仏としめしてぞ」の「無碍光仏」を方便法身とみて、ここでは、無碍光仏と呼ばれる方便法身は、法性法身から顕現した仏であることを表現されているとしている。そして、この「無碍光仏」（十劫成道の阿弥陀仏）を承けたのが、次の和讃の「久遠実成阿弥陀仏」であると解している。

その上で、十劫成道の阿弥陀仏を、わざわざ「久遠実成阿弥陀仏」と承けている意図を、太線部の「五濁の凡愚をあはれみて」と関連づけてみていくのである。すなわちまず、「五濁」と「凡愚」、さらには衆生の罪悪性や苦についての、善導の説示、及び親鸞の言

及・引文箇所を列挙し、久遠の過去から今に至るまで悪業煩惱を抱えた愚かな凡夫という表現を取り上げる。続いて、親鸞の「機者則一切善惡大小凡愚也^⑥」という「行巻」偈前の文より、救いの対象を一切の凡愚としていることをあげる。そして、これらの文言を根拠として、「衆生の罪業を久遠劫来のものと受け止めている親鸞にあって、阿弥陀仏は久遠劫来にわたりはたらきかけている仏と受け止めていたと思われる。だからこそ、親鸞は前の和讃で法性法身から顕現した方便法身である無碍光仏を、この和讃では「久遠実成阿弥陀仏」とあらわしたのではなからうか。」と指摘するのである。^⑦

ところで、月笠の十劫久遠論においても、親鸞の「自身現是罪惡生死凡夫、曠劫已来常没常流轉、無有出離之縁」という文より、無始よりはたらき続ける弥陀と曠劫久遠より迷う衆生を対立的に捉え、現に迷う私が救われるという、仏の救済に対した衆生の信仰体型を顕示していかれたのであるとの試論を提示した。筆者は、この点において、両者の思想の類似性を指摘すると共に、先で、当時存在した十劫秘事に対応するものとなっていると述べた月笠の思想に関して、更に視野を広げて考えてみたい。

大原性実氏は、十劫秘事が主張する思想の根拠となるのが、「浄土真宗の救いは絶対他力である」というところにあるとしている。つまり十劫秘事は、絶対他力の救いであるが故に、因も果も悉く阿弥陀仏において仕立てあげられているはずである、機の立場におけるたのむの信は条件的救いである、衆生の往生は仏の正覚の成就し

た十劫の昔にこの正覚と同時に成就されていなければならない、等と主張すると捉えている。^⑧

この絶対他力義が親鸞の根本的立場であることはいうまでもないが、注意すべき点は、救いが絶対他力であるが故に、ともすれば機受の信を忘れ、ともすれば客観的な理解に止まるような、誤った信仰に陥る危険性があるということである。十劫秘事や無帰命安心といったものはこの典型ではあるが、我々にも決して無関係のことではない。このように考えた時に、月筈が十劫久遠論によって、無始よりはたらし続ける弥陀と曠劫久遠より迷う衆生を対立的に捉え、現に迷う私が救われるという、仏の救済に對した衆生の信仰体型を顯示していかれたこと、また、「弥陀如来の正覚をなりたまへるいはれ」(如来正覚の因果)・「われらが往生すべき他力の信心といふいはれ」(衆生往生の因果)を流動的にあらわしたことは、単に当時の十劫秘事に対応するという意義に留まらず、今この私に對しても重要な意義をもつと捉えられるであろう。^⑨

結 論

本稿では、能化時代初期における十劫久遠論を研究するに当たり、月筈の思想を取り上げた。まず、彼の十劫久遠論が、「仏と衆生の関係を考察するに詳細を尽している」点に着目し、このような特徴を存する要因について考察を試みた。その結果、当時広がりをもせていた十劫秘事との関連を有したこと、存覚の思想を色濃く承けた

こと、また、浄土門内の分齊を明らかにして真宗教義の独自性を明確にしよとする当時の思想風潮の影響を受けたことが、一要因となっていると指摘するに至ったのである。この考察によって、筆者は、月筈の十劫久遠論の位置付けや特異性を明らかにすると共に、十劫秘事に対応する、そして浄土門内の分齊を明らかにする、という二点において、十劫久遠論の同時代的意義を見出した。

更に、月筈の十劫久遠論は、機受の信を忘却した十劫秘事の信仰に對応するという同時代的意義に留まらず、今この私に對しても重要な意義をもつと指摘した。つまり、救いが絶対他力であるが故に、ともすれば機受の信を忘れ、ともすれば客観的な理解に止まるような、誤った信仰に陥る危険性があるという意味において、現に迷う私が救われるという、仏の救済に對した衆生の信仰体型を顯示した月筈の十劫久遠論は、我々にも通じる思想となるのである。換言すると、私自身の愚かさを照らし出し、気づかせ、救ってくださるはたらしの上に、存在されている仏であるという阿弥陀仏觀を、月筈の十劫久遠の思想より窺うことができるのである。^⑩

月筈は、在野にありながら能化に匹敵する程の思想を有し、当時の宗学・安心の形成にも影響を及ぼしている。したがって、この時代に關する宗学史は、在野学匠の動向にもより焦点を当て、彼等の思想についても詳細に検討することによって、新たな様相を呈する可能性がある。また、月筈や知空等の初期宗学者の見解は、思想的特色及び同時代的意義を有するばかりでなく、後の宗学にも影響を

与え、現代にも通じる思想を内在している。よって、江戸期宗学における上述の根本問題の研究に際しては、これまで以上に初期宗学者の見解を考慮する必要性があると思考するのである。^⑤

註

- ① 本稿では、この能化時代初期という時代区分を、普賢大圓氏のいうところの「能化時代の第一期即ち西吟・知空・若霖の三代の間の宗学」と定める。(普賢大圓『真宗教学の発達』九一頁・一〇七頁)
- ② 同右・一〇七頁
- ③ 大原性実「月笠とその宗学」(『龍谷大学論叢』二五九)七七頁
- ④ 前掲『真宗教学の発達』一四五頁
- ⑤ 前掲「月笠とその宗学」八〇頁
- ⑥ 前掲『真宗教学の発達』一四五頁
- ⑦ 山本仏骨「蓮華藏閣月笠師の宗学」(『龍谷教学』八)九六頁
- ⑧ 妻木直良編『真宗全書』七四(以下、『真宗全書』七四)二九頁
～三五頁
- ⑨ 岩谷教授・田中真・山本浩信・佐々木瑞雲『真宗法要開版始末』(『教学研究所紀要』一〇)五三頁～一〇六頁
- ⑩ 月溪「笛峰道人月笠律師行状」(『真宗全書』六八、四三四頁～四三六頁) 玄智「大谷本願寺通記」(『新編真宗全書刊行会編『新編真宗全書』六(以下、『新編真宗全書』六)一八八頁) 龍護「清流紀談」(『新編真宗全書』一〇、三一九頁～三二四頁) 前田慧雲「本願寺派学事史」(『新編真宗全書』一〇、五三七頁～五四三頁) 鈴木法琛『真宗學史』六三頁～七五頁 井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』八二頁～八三頁 真宗新辞典編纂会編『真宗新辞典』一三三頁 日本仏教人名辞典編纂委員会編『日本仏教人名辞典』二二四頁 柏原祐泉・藺田香融・平松令三監修『真宗人名辞典』一〇八頁
- ⑪ 山本仏骨氏は、島根県飯石郡三刀屋町三刀屋の善徳寺に伝わる系

図、及び同寺に月笠が写した金泥の阿弥陀経が伝わっている点を考慮し、彼が善徳寺で生まれた可能性もあると指摘している。(前掲「蓮華藏閣月笠師の宗学」一〇三頁～一〇四頁)この点については、更なる検討を要する。

- ⑫ 『新編真宗全書』一〇、五四一頁～五四二頁
- ⑬ 前掲『真宗學史』六三頁～六四頁
- ⑭ 前掲「月笠とその宗学」九七頁
- ⑮ 和田幸司「近世初期における真宗信仰の一樣相―「光善寺教行寺簡条書」の破文を中心に―」(『法政論叢』四六・二)一〇三頁
- ⑯ 三浦真証「近世初期真宗教学の変貌―「私観子」からの考察―」(『真宗学』一二八)六〇頁～六一頁
- ⑰ 前掲「近世初期における真宗信仰の一樣相―「光善寺教行寺簡条書」の破文を中心に―」一〇二頁(傍線は筆者)
- ⑱ 大桑育「日本仏教の近世」一三七頁～一四一頁
- ⑲ 前掲「月笠とその宗学」七三頁
- ⑳ 『龍谷大学三五〇年史』通史編上巻、三三三頁
- ㉑ 『真宗全書』六二、二頁～四頁
- ㉒ 『真宗全書』六二、二頁～三頁
- ㉓ 前掲「月笠とその宗学」七三頁
- ㉔ 『真宗全書』五二、一九〇頁
- ㉕ 前掲「蓮華藏閣月笠師の宗学」九九頁
- ㉖ 一帖目十三通(真宗聖教全書編纂所編『真宗聖教全書 三 歴代部』(以下、『真聖全』三)四二〇頁)
- ㉗ 『真聖全』三、四六二頁
- ㉘ 前掲「月笠とその宗学」七七頁～八二頁 前掲『真宗教学の発達』一三六頁～一四〇頁 前掲「蓮華藏閣月笠師の宗学」九九頁～一〇一頁 堀祐彰「月笠師の如来論」(『龍谷教学』四〇)一三一頁～一四〇頁
- ㉙ 本来ならば関連する文の一々を取り上げ詳細に論じる箇所である

が、本稿では紙数の都合上、概略を述べるに留めさせて頂く。

③⑩ 『真宗全書』五三、三七頁・四〇頁

③⑪ 『真宗全書』五三、三七頁 『浄土和讃嘗解』二（星文堂淺野彌兵衛等刊）一八丁左・一九丁右・一九丁左

③⑫ 『真宗全書』五三、四〇頁・五一頁

③⑬ 『真宗全書』五三、四三頁・七一頁・七二頁

③⑭ 教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典全書 二 宗祖篇 上』（以下、『聖典全書』）二七二頁

③⑮ 『真宗全書』五三、四〇頁・五〇頁・五一頁・五三頁・五五頁・七五頁

③⑯ 『真宗全書』五三、五二頁・五三頁

③⑰ 『真宗全書』五三、五五頁

③⑱ 『真宗全書』五三、七六頁・七七頁

④⑰ 『真宗全書』五三、七七頁

④⑱ 『真宗全書』五三、七七頁（傍線は筆者）

④⑲ 杉紫朗『御文章講話』一五一頁

④⑳ よつて筆者は、『八條問答』・『護法篇』・『源頭論』は、十劫秘事、そしてこれに対する安心・学問・教学を説くという点において、関連を有するものと位置づける。

④㉑ 本来ならば、覚如・存覚・蓮如の十劫久遠の思想について、関連する文の一々をあげて論じる箇所であるが、本稿では紙数の都合上、筆者が注目する思想的特色の一面を先行研究（佐藤哲英『口伝鈔の研究』 普賢晃壽『中世真宗教学の展開』 三輪一了『本師本仏論の一考察』（『龍谷教学』二七） 梯實圓『十劫久遠論—親鸞聖人の仏陀観の側面—』（『浅井成海』『日本浄土教の形成と展開』） 前掲『月笠師の如来論』 高田未明『蓮如の諸行観と本師本仏論』（『宗教研究』八四・四）を参考にしつつ取り上げることとする。

④㉒ 『真聖全』三、一三頁・二六頁

④⑥ 梯氏は、幸西（一一六三―一二四七）と親鸞の久遠実成説を統合するような阿弥陀仏観を表明したのが覚如の『口伝鈔』（開出三身章）であるとする。その幸西と親鸞の久遠実成阿弥陀仏説の相違点として、幸西が『玄義分抄』二乗門釈において、阿弥陀仏に本迹関係のみを、本門を久遠実成、迹門を十劫正覚（垂迹・果後の方便）とし、『十劫正覚』に誠説ならむや」と述べるに対し、親鸞は久遠と十劫に本迹を立てず、久遠実成の阿弥陀仏が本願を選択されたといひ、十劫のままが久遠実成であるとしたことをあげる。そして覚如は、幸西が『玄義分抄』において『法事讃』や『般舟三昧経』によつて阿弥陀仏を本師と定めた釈義を受け継いで、久遠実成説に基づく本師本仏論を展開されている」としている。（前掲『十劫久遠論—親鸞聖人の仏陀観の側面—』三二二頁・三三三頁）

④⑦ 『真聖全』三、三四〇頁

④⑧ 『真聖全』三、一三〇頁、これと同趣の記述内容が『持名鈔』（『真聖全』三、九二頁）にも示されている。

④⑨ 三輪一了氏は、存覚の本師本仏論について、覚如の阿弥陀仏本師本仏論の意を承け、『本師』と『本仏』の語を明確に区別して使用しているとする。つまり、阿弥陀如来を『本師』という時には、三世の諸仏は阿弥陀如来の本願を念じて仏になったのであるから、弥陀は『本師』、諸仏は末弟子となる。また阿弥陀如来を『本仏』という時には、十方の諸仏は悉く阿弥陀如来の教えを説くために、弥陀の浄土から出現したのであるから、弥陀は『本仏』、諸仏は末仏となると解釈している。更にこれが蓮如に至ると、『本師本仏』と一語にして、諸仏は阿弥陀如来の本願力によつて仏になったと同時に、阿弥陀如来の教えを説くために浄土から出現した仏という意を示すとする。（前掲『本師本仏論の一考察』六二頁・六七頁）

④⑩ 普賢晃壽氏は、覚如が本師本仏論を展開した要因として、諸宗の諸仏に対し阿弥陀仏の優位性を主張し、浄土真宗、親鸞一流の教学的立場の確立をめざしたことをあげる。特に覚如・存覚の時代は日

蓮宗の京都進出、山陽道への発展がみられることにも言及している。また存覚についても、釈尊は久遠実成の実仏であり、一切諸仏の本師本仏であつて、阿弥陀仏は釈尊の分身、所従の権仏であるとする日蓮の仏身論に対して、本覚思想の上より『法華経』『尋常品』の久遠の釈迦と弥陀とを同一体とし、弥陀が一切諸仏の本師本仏、根源であると主張したとする。(前掲『中世真宗教学の展開』九三頁・二二三頁―二二五頁)

⑤① 『真聖全』三三、四三〇頁・四三六頁・四三八頁・四六七頁

⑤② 前掲『口伝鈔の研究』一九九頁 前掲『蓮如の諸行観と本師本仏論』三六六頁―三七七頁 尚、都河善鉦氏は、蓮如が本師本仏論に關連して「久遠実成の古仏」と示している点について、「これは十劫秘事に簡んでの釈である」と述べているが、筆者はそうように断定するためには、更なる検討を要すると考える。(都河善鉦「本師本仏について」『龍谷教学』二九、一二三頁)

⑤③ 赴機について、月笠は弥陀の赴機とする。一方で飯島氏によると、知空は「明確に説明していないが、経の当面は「釈迦の赴機」の立場である。」としている。(飯島憲彬「知空師の「十劫の説意」について」『浄土和讃首書』を中心として)『宗学院論輯』八二、一頁)この二つの見解について寛寧(一七八九―一八七九)は、釈迦の赴機説を否定し、月笠の「稱讃浄土教説」に説かれる弥陀の赴機説(弥陀の別縁受化の機に赴いて再び正覚を取りたまふ所の時劫を於今十劫と説く)に単の十劫を兼ねる義をとるのである。更に、「先輩皆此義に随ふ」とも述べており、月笠の思想は、後の宗学に影響を与えているといえる。(真宗義書編輯所編『真宗義書』二(以下、『真宗義書』二)六六七頁―六六八頁)特に空華学派を通して一層高められた別縁受化の機に赴くという思想、数々成仏説は、現代に至るまで研鑽されている。

⑤④ 前掲「知空師の「十劫の説意」について」『浄土和讃首書』を中心として一六頁、この論考の中で飯島氏がいうように、上述の

四家の説は後の議論の基礎となり、論題「十劫久遠」において、十劫の説意が論じられてきた。

⑤⑤ 前掲『浄土和讃首書』二・一九丁右―一九丁左

⑤⑥ 筆者は、歴代の思想から新たな展開をみせ、後の宗学にも影響を与える上述の知空や月笠の見解が、十劫久遠の思想の展開過程においても、重要な一点であると考ええる。

⑤⑦ 本来ならば、親鸞の十劫久遠に関する説示と、これに影響すると考えられる経釈の一々をあげて論じる必要があるが、本稿では紙数の都合上、筆者が注目する親鸞の思想的特色の一面を、先行研究を参考にして取り上げる。

⑤⑧ 『聖典全書』二、五九頁

⑤⑨ 普賢保之「親鸞の如来観」(『真宗学』一〇九・一一〇)四三五頁―四四〇頁

⑥⑩ 大原性実「真宗異義異安心の研究」三二二頁―三二三頁

⑥① 先哲の中には、久遠ということを重要視する立場と重要視しない立場とがある。すなわち石泉などは、久遠は天台法華に対する説であると対外的な一面のみでこれを解釈し、強いて久遠を論じる必要はないという立場をとる。(『三帖和讃観海篇』三、光宣寮 一五丁右―一七丁左)一方で善譲などは、向内・向外の二面より、久遠を重視する立場をとる。「一に為顯本師尊高故、二に為成十劫為物故、三に為増三行者敬信故。」(『真宗義書』一六七頁)上述のように、筆者は、対外的な一面のみで十劫久遠の思想を解釈するべきではないと考える。

⑥② 田畑正久「念仏はなぜ難信なのか」(『在家仏教』七二六)五八頁―五九頁・六六頁―六七頁

⑥③ 本稿にて十分な考察ができなかった点を、今後の課題として以下で略述する。まず、月笠の十劫久遠論以外の教学に關しても詳細なる検討を行う必要がある。また、能化時代初期における他学匠の動向や思想についても、幅広く考察しなければならない。その際、在

野の学寮等の学問機関の状況と、これが当時の宗学に与えた影響という点にも注目していく。更に、各々の地域における出版文化の発達と、教学・安心との関連について、『月筌聖教目録』等の「聖教目録」を用いて考察を行いたい。これらの在野学匠・寺院等の検討に当たっては、地域史等の資料も参考にしながら、引き続きこの時代の宗学史を再考していく。また、能化時代初期が「素朴時代の宗学」と位置づけられる点を再検討するために、このような評価がなされる一要因、すなわち、仏教学の模倣、応用といった当時の研究方法に関して新たに考察を施す。つまり、上記のような研究方法が宗学の発達に与えた功績という一面について論及していきたい。